

親と子のやりとり

電車の中で、お母さんに抱っこされた赤ちゃんを見ました。
お母さんがいすに座って抱いていた赤ちゃんも横におろしました。
その赤ちゃんはよく動き、いすに顔をうずめたような形になりました。
お母さんはすこしあわてて、起こしました。
赤ちゃんは笑顔で答えていました。
いつもそばにいてくれる人といっしょだから安心しているんでしょう。

スーパーに買い物にきている親子を見ました。
お母さんは、かごをさげて買い物をしています。
お父さんは子どもに
「ぶどう、どれ？」
「みかん、どれ？」
とたずねています。
子どもは問われた物の前まで行って、お父さんの顔を見えています。
このあと、お父さんと子どもは笑顔でやり取りしていました。
お父さんと子どもの中で、かわされた視線や笑顔にはこんな意味があるのでしょうか。
「前、お母さんと食べたとき、言ってたなあ。ぶどうって、これだったかな。」
「ピンポン、正解」
「よかった。甘くて種があるんだよね。つぎは何？」

お母さんが、子どもと手をつないで園に行かれます。
子どもは少しずつ遅れだします。
手を引っ張られていくようです。
お母さんの歩幅と子どもの歩幅が違うからです。
お母さんは子どもを園に届けた後、何か用事があるのかもしれませんが。
朝からお母さんと子どもの間に何かあったのかもしれませんが。
大人が歩幅を子どもにあわせること、
視線を子どもに合わせることも必要です。
また、子どもが歩幅を大人にあわそうとすること、
飛び上がり、視線を高くすることも大切です。

幼児の指導を終えてお母さんと話しているときです。
お母さんが幼児の妹の姿を見て、
「あれっ？」と言って、はいはいをしている妹に近づいていきました。
妹さんの口に手を出し、「ぺっ、して」と言っています。
幼児の妹の唇は閉じたままです。
お母さんは指で唇を開いて、口の中から消しゴムを取り出しました。
「いつも見ているお母さんだからわかるんだ」
と思いました。
お母さんは自分の子どもの専門家だと思いました。

おじいさんが溝に糸をたらしています。
少しはなれたところで、男の子も糸をたらしています。
ザリガニを釣っているようです。
ときどき、男の子はおじいさんの方を見えています。
ザリガニがつれたか気になるのでしょうか。
おじいさんが糸をあげると、糸の先には小さなザリガニが一匹いました。

こんな経験もことばを育てるんでしょうね。

女の子をおんぶしているお母さんが電車に乗ってきました。
そのそばに男の子がいます。
男の子がお母さんに何か話しています。
お母さんは腰を下ろして男の子の話を聞いて、
「よかったね」
と笑顔で声をかけていました。
お母さんの笑顔に安心できたんでしょうね。
その後、男の子は、手すりを持って、静かに窓の外を見ていました。

朝、登園中の子どもが、道のまん中に座り込んでいます。
虫かごをおいて、虫の見せ合いっこをしています。
どこで見つけたのか。
何をえさにあげているのか。

どれだけ力が強いのか。
話しをしているようです。
前を歩く、お母さんに声をかけられて、虫かごを持ち、また歩き出しました。
自慢話しもこの時期の子どもには、必要です。

雨の季節になると思い出します。
駅から親子3人が歩いて、教室に通ってきます。
雨と風の強い日でした。
子どもはレインコートを着て、傘をさしてやってきました。
お母さんも傘をさしていましたが、右肩からびしょぬれでした。
どうやら、お母さんが右手で子どもの傘を抑えて来られたようです。
子どもが雨にぬれないように・・・。

三階の窓から、幼稚園に子どもさんを送る親御さんを見ていて気づきました。
冬の寒いときはそんなでもなかったんですが。
暖かくなるにつれ、親御さん同士が話し込んでいるということです。
暖かくなるにつれ、三階まで声が聞こえてきそうです。
「話に花が咲く」
つぎからつぎへといろいろな話が出てくることを言います。
暖かくなると、話もしやすいのでしょうね。
寒くなると口が堅くなり、
暖かくなると口が軽くなるようです。
気温と話す量は関係がありそうです。
気温が高くなりすぎるとどうでしょう。

子どもと母親のこんな光景を見たことがあります。
子どもは表情や手の動きで「それがほしい」「それは食べたくない」といった意図と情動を表現しています。
母親は子どもの表情や手の動きから子どもの意図や情動を読み取り、行動していきます。
小さい子どもさんを連れのお母さんです。
お母さんが子どもに、
「これがほしいの？」とお皿をとっては子どもに確かめています。
子どもは、その皿を見て、

「うーん」

とおこった顔を見せたり、笑顔を見せたりしています。

手をばたつかせたり、伸ばしたりしています。

ことばをまだ話せない子どもが顔の表情で、手で「お母さん、それは食べたくないよ」

「それを食べたいよ」

と話しているようでした。

このような母親と子どもとの意図や情動の共有が、子どもが親のことばを理解する基盤になるのです。

ホームに乳母車を押してくるおばあさんとお孫さんがいました。

その子は、1才くらいでしょうか？

電車が近づいてくるのをじっと見つめていました。

おばあさんは、しきりに

「かんかんかん。」

「かんかんかんにのるよ。」

「いいね。」

と話し掛けています。

その子は駅を通り過ぎ、遠のいていく電車をじっと見て、手をうっていました。

おばあさんは

「かんかんかんだね。」

「いったね。」

と声をかけています。

待っているホームにも電車がやってきました。

子どもがさっきより大きな声で

「かんかんかん」

と言いました。

通過していく電車の風を感じたのか、声をあげて子どもは喜んでいました。

そのとき、おばあさんは

「びゅーんだね」

「はやいね。」と声をかけています。

電車に乗り、座席に座ると その子はおばあさんに抱かれて、隣にすわりに来ました。

おばあさんが、その子の靴を脱がせ、すわらせました。

反対側を走る電車を見ては

「かんかんかん」

と言っています。

おばあさんも

「かんかんかん」

「かんかんかん、はやいね。」

「でんしゃ、いっぱいね。」

と子どもさんのまねをしながら、ことばがけをされていました。

「共有していることが多いな」と思いました。

その子が何をみているのか？

何を待っているのか？

何を楽しみにしているのか？が

おばあさんにはわかったのでしょうか。

その気持ちにおばあさんがことばがけをしていました。

子どものことばを使って、・・・。

子どもがみているものを見て、子どもが感じていることを感じる。

そのときに出てくる子どものことばを大人が模倣する。

そして大人がもう一つ新しいことばを入れて話す。

そのことばを子どもが模倣するまでくりかえす。ここからことばが育っていく。

電車の中でこんな子どもと母親を見ました。

母親は子どもと視線を合わせ、子どものことばを繰り返し、助詞をつけたし、さらにそのスピードを説明していました。

子どもが反対の路線を走る電車を見ていました。

すると、

「でんしゃ、いった」と指さしながら、お母さんの方を見ました。

お母さんは、

「電車がいったね。はやいね。」

と答えながら、子どもの方を見ていました。

子どもはまたそれに答えるように、何回か同じことをくりかえしていました。

子どものことばに共感することで、母親と子どもの間に安心感が育ち、子どものことばがふえていきます。